

「原」と「名」と「な」と「なる」

鈴木俊晴

私が訪れたのがちょうど宵の闇が降りようとするところで、照明のない、というか、中央の椅子のほかに部屋の四隅と正面にほんの小さなスピーカーが置かれているだけの展示室は暗闇に沈んでいる。だからなのか、この不在を強く感じさせる空間において、河原温についてこれまで様々なかたちで言及してきた奥村の個展とあって、自ずと思ひ浮かぶ言葉は「passing（過ぎ去り）」であった。窓の外の人や車の往来や、いささか唐突にも見える既存の扉の存在もまた、どこことなくフランシス・ベーコンの絵画の小道具を思わせ、あちらへ行ってしまうことについて考えようとする。

ところが、語り手の山辺冷（＝奥村雄樹）の口ぶりになかなか馴染めず、話に入り込めない。さらにレイ・ハラカミが挿入歌として流れてくると、メキシコでもニューヨークでもなく、否が応でも京都にすることを意識せざるをえない。

そのまましばらく聞いていると、5.1chの指向性の強い音響の効果のなか、山辺の「な」のイントネーションがおかしいことに気づく。「働いたことの**ない**細長い指だった」「**名前**と聞かたびに不安になるのだった」。繰り返される奇妙な「**な**」を念頭にドラマを聞いていると、「河原温」あるいは「河名温」について想像しながら、同時に「な」について思考するよう促してくる。

「な」はやはり「無い／亡い」の音を思わせなくはないが、まずは取り急ぎ「名」のことだとしよう。というのも、狂言回しである「わたし」はここで、1) 名前を変える（変えようと思ひ立つ、しかも2回も）。2) パスポートを預ける。つまり国籍を通したアイデンティティを他人に委ねる。3) 肩書きを嫌う（河名がMoMAに招待された、という話を聞いて内心がっかりしている）。というように、名前、国籍、肩書きといった、私たちが人物を同定しようとするときに手がかりにするものに疑義を呈しているのは明らかだ。

一方、話中では、そうした同定ではなく、手や足のディテール、食事の好みによって人物が語られ、私小説的な内面ではなく、細やかな観察に対して、抽象的なアプローチによって人物が描写される。

「ここだけの話」として語られる醤油の小瓶のエピソードなどは、河原のあの作品のストイックな佇まいとのギャップが大きいだけに、より人間味のあるものとして響く。伝説の隠者・河原温がにわか色彩を帯びて見えてくる。

さらには、[この](#)横向きの「な」の「なる」と読めてしまうフォントの選択。つまり「名になる」と。これはほとんど河原温にも当てはまる。河原温（かわはらゆたか）はかつてカワラオンになり、

On Kawaraになった。そして河原温はこのドラマ内では河名温になっている。あるいは、演技上では奥村雄樹が山辺冷になり、山辺冷が佐原次郎（という偽名を得た主人公）に、そして眞島竜男が河名温になる。「原」から「名」へと人格（のようなもの）が手渡される。あるいはその逆も。この時「わたし」はかりそめに与えられているに過ぎない。そして、人格が手渡されるからといって、安易に人称は複数化されはしない。だから、彼らはクライマックスにおいても「We are still alive」などと唱和できるはずもなく、「I am still alive」と同時に言うしかない。しかし、それを言ったとしてもその生存の確証は口にしたその次の瞬間に過ぎ去っていき、常に一つの「わたし」を証明し続けなくてはならない。これは明らかに河原温的パラドクスだ。

さらに放送末尾に河名温の妻・河名弘子と同じ声のナレーションで入る「フィクションです」「実在の人物とはいっさい関係がありません」というお決まりの断りも、この文脈において嫌にきっぱりと告げられることによって、むしろ誰と関係がないのかわからなくなる。逆にフィクションであり、不在の人物と関係があるのだとすれば、そこに関わってくるのは誰か。それは、フィクションの河名温かもしれないし、生ける伝説だった河原温なのかもしれない。あるいは、「わたし」が不断の「わたし」の更新に過ぎないのだとしたら、さらに逆に、フィクションではなく、実在の人物とはいっただどこにいるのだろうか。

-

本稿は京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAで開催された奥村雄樹の個展「[な](#)」（2016）のレビューとして執筆された未発表の論考（2016）である。奥村は同展において 5.1ch サラウンド・サウンドによる 29 分のオーディオ・インスタレーション《グリニッジの光りを離れて（河名温編）》（2016 | 原作：宮内勝典『グリニッジの光りを離れて』1980 河出書房新社 | 監督・脚本：奥村雄樹 | 録音・編集：濱哲史 | 出演：眞島竜男（河名温） 渡辺美帆子（河名弘子） 山辺冷（佐原次郎） | 音楽：藤本一郎 レイ・ハラカミ ススム・ヨコタ | 協力：Artists' Guild 河出書房新社 MISAKO & ROSEN Musicmine | コミッション：京都市立芸術大学 | キュレーション：徳山拓一）を発表した。フライヤーのデザインは立花文穂。